小さき者へ

有島武郎

お前たちが大きくなって、一人前の人間に育ち上った時、その時までお前たちのパパは生きているかいないか、そ

れは分らないことだが　　父の書き残したものをりげて見る機会があるだろうと思う。その時この小さな書き物もお前たちの眼の前に現れ出るだろう。時はどんどん移っていく。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像も出来ないことだ。らく私が今ここで、過ぎ去ろうとする時代をいれんでいるように、お前たちも私のい心持をいれむのかも知れない。私はお前たちのためにそうあらんことをっている。お前たちはなく私をみ台にして、高い遠い所に私を乗りえて進まなければっているのだ。しかしながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にいるか、あるいはいたかという事実は、永久にお前たちに必要なものだと私は思うのだ。お前たちがこの書き物を読んで、私の思想の未熟でなのをう間にも、私たちの愛はお前たちを暖め、め、まし、人生の可能性をお前たちの心に味覚させずにおかないと私は思っている。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

－22－